學びの感激[[1]](#footnote-1)

香山光郎

八月の十五は東のにがかゝつてゐて、時々月のをしてゐた。町とへば清に近い場末であるが、しい家々にも月はつてゐて、電の光の下に夕をましての欒の法師がれた子に映つてゐた。

はこの町で今行はるべき女子学のを見るべく狭い路にを曳いた。

古いすぼらしい校ではあるが、明々と電がついて居つて、十五とれのとが一に來たといふので、晝間の場のれをれて新しい物を着つた若い人や女の子たちが、や入に集つてゐたり、からを出してゐたりすると、大やかに見えてしかつた。

「これからがまります。さん着して下さい」

と、男の員と女の員がれると、生たちはく間に場へと消えた。

場といふのはで、黑板のところにを張つて、大の日をりその前にテーブルが一かれ、その左右に來と員、そして生たちはいづれも白足袋を履いて氣を付けの姿勢で、ぎつしりとつていゝ程、然しちやんと間正しいを作つてんでゐたが、のは喜びにいてゐた。も掛も除けてしまつて、床は真白に拭き清められて迚も整然としてゐる。これが一丁も知らず、の仕方も知らなかつた無の女子で、三ケ月百五十時間のとをけた人たちなのである。その百五十時間といふのは、等が一生におけるの全なのだ。

「」

「城にひ奉り最。直れ」

までは大してかなかつたが、

「が代合」

で六十五名の女子が實にかに國をつたのには、實にせざるを得なかつた。「まんまるいお月様のやうにいて下さい」といふ設立者のがあつて、生代表にがあつた。代表といふのは朝に結つた二十四五の家人で、その歩きつぷり、の仕方、書をけて下がる作法など立なものであつた。

「いましばらくしたら、さんの弟や妹や、お子さん方は学校へはいれます。が実施されるのです。それからさんの弟たちや男の子たちはでない限り、お國のために兵さんになるのです、兵と申すものです、正しいになり母になつて、陛下からおかりしたお子さま方を立にてて上げて下さい。よいことさへして居れば、神さまは必らず吾々によいことをして下さるのです」

という意の來からのがあつて、最後にをかしたのは、等が君が代と同様の鮮やかさを以て「海行かば」をひ除けることであつた。

を閉じて員は、

「上に、生達の會があります。茶を差上げることになつて居ります」とつて吾々を二に内した。二も實に綺麗にめられてゐる。上に白い洋紙を五寸に切つて、子皿や碗の敷物にし、そして、同じ大きさの紙切れで子や碗がはれてゐた。その細かい心遣ひもしかつた。

よく沸いたががれると、先の代が謝を述べた。紙切を手に持つて朗読してゐるのであつたが、発も中々正であつた。それは先生に書いてつたものらしく難しい言葉もあつて、二三ケ所むところがあつたのも微笑ましかつた。假令まずくても、自分のことばで謝をべてほしかつた。しかし、か百五十時間のである。それでよくこれだけの知とが得られたものだとせざるを得ない。

「何ですか、御は？」

と設立者の野村弘遠氏に訊かれては、

「全くとです。人の風をへてゐるではありませんか」

と云つた僕のことばは、決して□□ではないとふ。

これらの生たちは、三ケ月のの内に、内地の作法にもれ國で日の會話が出來、ラヂオもえ、も掛まで學んだのださうである。

「めの中はをするものもありましたがね。のをしたので、後の半分はがなくなりました」

これはの先生の説明であつた。

これから生たち同のお別れの茶話會があるといふので、私達はをしたのであるが、生たちが關やのところまでついて來て丁にを曲め

「ありがたうございました、さやうなら」

と國で別れのをいつてれた。何と眞心つた「さやうなら」であらう。はくば等の上にあれ。

に、これは野村遠氏を會長とする國會が昨年からめた學動の一つで、現京城内では十六ケ所やつてゐるさうである。小學校の校を借り、員に月三十圓の手當を支給するのであるが、一學一三ケ月間の百圓で、その百圓は野村會長自と聞いた。各地のは野村氏につてほしいものである。（『京城日報』1940年9月19日）

1. 『京城日報』1940年9月19日 [↑](#footnote-ref-1)